
1 0 t h

夜白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10th

【Nコード】

N1623G

【作者名】

夜白

【あらすじ】

笑い顔の男は舞台俳優かのように両腕を目一杯広げた。その背後の男はじつと少女を見つめている。少女はすう、と意識がはつきりしたのを感じた。生きる路に迷った少女は踏み外れた人たちに出会った（引用）

曖昧な距離（前書き）

時制不一致。お題により書いていく短編集。
かなり表現が残酷で暗いです。ご注意ください。

曖昧な距離

曖昧な距離

ある日のこと、情報屋の新は何ヶ月かぶりに彼らの家を訪れた。二、の名前を持ってしている通り、新もまた彼らの集団の一員であった。彼は自ら手を染める仕事をしない。その代りに彼ら……勒や零たちが実行するための仕事を持つてくるのは新だった。集団内でも情報屋として呼ばれることが多い。

そんな情報屋は突然訪れた。なんというか、ぱつと現れた。零が後ろに突然立つのとは比べ物にはならないが、存在事態が薄いからか職業柄か彼にとっては自然な動きであっても驚かせることが多い。

「やあ、零。元気？」

今回は真夜中の零の寝室を訪れた。窓から。

零は電気をつけてない部屋で一人椅子に座っていた。そんな中、新は窓の棧に体を預けだらーんと溶けた。そんな新をちらりとも見ず、相変わらずの闖入者に一言。

「……飽きないんだな、新」

「愛想ないなあ」

新はひよいと窓を飛び越して部屋に入る。零の許可もなく、また靴を脱ぐこともなく。けれど零は何も言わない。

「今日は何してたの？」

新は許可も取らずに零の向かいのベッドに座り込んで手を組み、前かがみになる。決して不機嫌でもなく、楽しそうでもなく。

「……お前がくると思った」

「へえ！」

新はおどけたように声を上げる。

「いつもそういうね」

「いつもそういう」

別に何かいうわけでもなく肩をすくめて零は手元にあつた書類を新に投げてよこす。反射的にそれを受け取り何十枚も連なつたそれを新居は一枚一枚丁寧に見直す。

「さすがお父さん」

「なんだそれは」

「ろつくんからきいたの」

「そうか」

それから何をしゃべるでもなく部屋は静寂と時々新が紙をめくる音だけになった。決して重たいわけでも気まずいわけでもない空間。

「ん……………」

しばらくして新は書類を畳み小さく唸る。

「確かにちゃんとこなしてるみたいだね…………でも、分担が…………」

「結果が全てだとお前は言った」

皆まで聞かずに零は言った。言うというよりもそれはいつもの零にしては少し抑揚が聞いてとれた。

「最後まで聞きなよ」

今度は新が肩をすくめた。

「七割が勒と零だよ。椎に至ってはほとんどない」

「それがどうした？」

「悪いって言ってるんじゃない。ただ不公平じゃないかと」

「……………」

しばらく沈黙が訪れる。零は無言で微動だにせず、新はいらいらしたように足を揺すっている。

「大体僕は拾つたことにも納得していない」

沈黙に耐えかねて新は付け足す。少し不機嫌に口を曲げ、零を見据える。零もその視線から目をそらさない。

と、突然零は立ち上がり入口の戸をあけて目の前の部屋を指さす。

「……………今日はその部屋を使えばいい」

「ちょ、待ってよ!?!? 話の続きは!?!?」

「もう深夜だ」

新は立ちあがってほぼ糾弾に近い声を上げる。けれどその声を一蹴して促す。

「明日になればわかるだろう」

「僕は長居しない！ それにその部屋は何ヶ月も使っていない」

新は何ヶ月もこの家を離れていた。もちろん部屋も使っていない。どんな状態かは火を見るよりも明らかだっただろう。

「行けば分かる」

けれどそれだけいい零は部屋から新を追いだした。新はしばらくたつた今閉められた零の部屋の扉の前にたちつくした。

「む、むちゃくちゃだ……」

ポツリ、と呟いた。けれど次の依頼を放していない情報屋は帰ることもできず、さつきもらった書類も零の部屋に置いてきてしまった。

「……っ！」

新は仕事に対してのプライドが高かった。

息を吸って半ば投げやりに自分の部屋である倉庫化した部屋の扉を開けた。

「……へ？」

そして間抜けに声を出した。あけた部屋は埃だらけの倉庫でもなく虫たちに占拠された無法地帯でもなく、あの時出て行った時のままの部屋だった。見たことのない家具や物置に服や本や書類や機械が整理されておさまっていた。

後ろを振り向き零の部屋の戸をあけた。次の瞬間ナイフが飛んでくるのが見え、瞬時に戸を閉めた。……話は聞けそうになかった。

「……」

奇妙だがどうしようもないので仕方なく自室のドアを閉め、けれど眠りたくもないので適当に本を引っ張り出しソファに腰掛け眼鏡を取り出す。その眼鏡も誰かが手入れしたのか曇り一つなかった。

そのままぺらぺらとページをめくり、目で字をなぞった。

「……………」

か細く、不安げな声が聞こえて新は目を覚ました。目が覚めて、寝ていたということに気がついた。下を向きながらかしかしと頭をかいた。いつの間に寝ていたのか、本は何冊も下に散らばっていた。

「んあ……………明る……………」

「ひゃ……………」

「！？」

「っ！？」

突然聞こえた悲鳴に新は反射的に手を伸ばしその腕をつかむ。

するとその人物も驚いたのか息をのむ気配が感じられた。つかんだ腕はやけに細かった。新は一瞬、ここはどこだと思った。目を細め、眼鏡越しにつかんだ人物を見る。年のころは16、7……………高校生くらいだろうか……………まだ幼い顔をしていて新が睨んでいると思うのだろうか、少しおびえている風に見えた。

次に、似合わないと思った。

「誰？」

「ご、ごめんなさい……………」

言葉が重なった。新は頭をまたかしかしとかき、えと……………と言葉を失った。いきなり謝られるという経験はまるでない。

「あ、椎と言います……………」

「しい……………ああ、君が……………」

実は実際に新と椎とが会うのははじめてだった。椎はたぶん新の事はわからないのだろう。

「あなたは……………新さんですか？」

「え、わかるの？」

「あ……………はい……………はじめまして……………」

ところが違った。新にしてみれば自分のことを知られていることは意外だった。それよりも新は椎があまりにもここには不釣り合い

だと思った。彼女、には殺し、の文字がまったく似合わなさそうだった。

「あの、ご飯……できたんですが……」

おずおずと椎は日常的な、でもこの場合には絶対的に不釣り合いな言葉を新にかけた。失礼ながらも新は思いつきりずっこけた。そして声をたてて、笑った。

「もしかしてこの部屋も？」

「あ、ごめんなさいっ！」

笑いながら聞いて、また椎は謝った。

「勝手に……片づけちゃいました。……帰ってきたときに使うかなと……」

最後の方の声だんだん小さくなっていった。声と一緒に体まで小さくなってしまおうような、そんな感じだった。なんだか小動物を思わせた。

「新。……もう仲良くなったのか」

「零」

「……！？ ぜ、零さん……ご飯できました」

「ああ、ただごう」

零はいきなり声をかけたかと思うと、軽く新の部屋の中の様子を覗いてから二人を置いて先に行ってしまった。そのあとに鞆が走っていく姿も見えた。新は再び声をたてて笑ってメガネをしまった。

「僕の分もあるのかい？」

「も、勿論です！」

「じゃあ行くごうかな」

少し意地悪言ってみたら椎は少しあわてて少しむきになったように言った。またそれが可笑しくて新は立ちあがってうーんと背伸びをした。そして歩き出そうとしてふと後ろから何かに引っ張られて少しつつのめった。見ると椎が新の服の裾をつかんでいた。

「ん？ どうした」

「わわっ、ご、ごめんなさいっ」

椎はあわてて新の服の裾から手を放す。新は首をかしげてうつむく椎を見つめる。一方見つめられている椎は気恥ずかしくて顔をあげることもできないでいた。新は本当に小動物みたいだと思った。「あの……ゆっくりしてください」

いきなりの言葉に今度は体ごと振り返って椎をみる。見れば椎はうつむいたまま言葉を紡ぐ。

「ここは家だつてみんな言ってます……だから新さんも……」

言葉の途中で新は椎の上に手を置きしゃがんで身長を合わせる。そうして微笑む。

「ありがと。なんだか妹ができたみたいだ」

新は本心からそういった。なんだか和やかな気分になった。食事を食べに行く前に零の部屋に寄った。そうして昨日言われた言葉を反芻してみた。

資料をもつて降りた新はみると久々にみんなの顔を見たきがした……実際にそうなのだが

。「情報屋……珍しいな」

椅子に座れば隣にいた吉が新を見上げた。褒め言葉ととっておくことにして新は改めてテーブルを見渡した。今この家にいるであろう全員がこの場に集まっていることに新はものすごく驚いた。これじゃ、まるで……

「家族、みたいじゃないか」

言つて、可笑しくて、気恥ずかしくて、照れくさくて、驚いて……とにかくいろんな感情が混ざって新は笑った。

食事のあと零は新に一言だけ言った。

「適材適所」と。

そして新はいろいろ話したいことがあると無理やりみんなと話を付けてきつちり一週間……家で過ごした。

ほんとは居心地が良かったなんて決して言わないけれども。

桜貝

桜貝

「……つたく、なんでよりによってこいつと……」

「それは俺のセリフ。俺は椎と来たかったのに」

「ほざいてる」

壱はそう言っただけのため息をつく。大体こんなところに椎を連れてこられるわけがない……海は海でも仕事場なのだ。

「……！」

動いた気配を察知して壱は懐へ手を入れる。振り向きざまに右手をふるえば確かな手ごたえ。それでも尚スピードは落とさずに左手で人影をつかみ振り下ろす。ドンっという音とともに二人の目の前に人が倒れる。壱の小柄な体が持ちあげたとは思えない大柄の男だった。男はぴくりとも動かない。ひゅーっ、と参が口で鳴らす。

「いつの間に腕上げたんだ？」

「別に……慣れただけだろ」

参の問いに壱はむすつととして答える。そして海に向かい手とナイフについた血を洗い流す。

ざあ……っという波の音は壱にとってとても好きな音だった。すべてを洗い流すようで、海によれば自分のしている罪もぬぐわれるそんな気がしていた。

ふと砂浜をみるといろいろなかけらが光っていた。

「……きれいだな……」

ポツリ、と呟いた瞬間、ドンっ重い音がした。急いで振り返ればこちらを見据え、銃を構えた参と目があつた。参は壱と目が合うとにやっ、と顔をゆがめた。

「まだまだだな、壱は」

「なんっ……！」

全部言い終わる前に吉は立ち上がりすうつ、と横に移動する。さつきまで吉がいた場所に小柄な少年が倒れた。じわつと左胸から血がにじむ。

「……誰……だ……？」

吉は不思議そうに少年を見、参を見る。参は手元に持っていた紙をひらひらと掲げる。

「親子だったんだよねー、ターゲット。息子見えないと思ったら吉の背後狙ってたからさ。もしかして油断してた？」

「ばっ……そんなわけ……」

「子供は素直なほうが可愛いんだよ」

ニヤニヤしながら参は銃をしまい出口のほうへと歩いていく。

「任務終了。さっさと帰って椎のご飯が食べたい……早く行くよ」

「……ああ」

吉は軽く返事をして海岸に目を戻す。光っている欠片の中にただ一つだけ割れていないものがあつた。それを優しく拾い、一度海水につけて大切に握る。そして死体には振り返らずに参の後ろを歩いていく。

それは一つしか見つからなかったサクラガイ。

大切な君へ、届けるよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1623g/>

1 0 t h

2011年1月4日00時18分発行